

## 国民道徳運動推進者としての広池千九郎

—— 斯道会における活動 ——

櫻井良樹

### 目次

- 一、はじめに
- 二、斯道会について
- 三、広池千九郎と斯道会との関係
- 四、宗教と国家の関係
- 五、広池の斯道会での活動
- 六、おわりに

### 一、はじめに

明治時代の末ころから広池千九郎は、人間一人ひとりが社会に対して感謝の気持ちを持ち、他人のために日々奉仕することによって世の中を改善していかねばならないと考えていた。天理教に共感したのも、その「借り物」と「日の寄進」の教理が、人間は自分に生命を与えてくれた宇宙（神）に対して感謝の気持ちを持ち、恩返しのために他人のため日々奉仕活動をしななければならないと説いていると解釈でき、また「心の埃」を取り除くという教理が広池の主張する「慈悲寛大自己反省」の精神と一致していると考えられたからであった。さらに広池は、魂を救済し、時には病氣をも癒すことができるという宗教の特色を認めながらも、救われた人々が宗派を越えて他人のために働き、他人を同じような精神に導くことが理想であると考え、それを天理教祖のめざしていた

ものであると解釈していた。そのころ天理教団が進めていた戊申詔書講演会の講師を広池が引き受け、それをきっかけとして天理教に入信し、さらに三教会同に関する天理教団の活動に関わっていくのはこのような考えかたに一因していた。<sup>(1)(2)</sup>

しかし以上のような考えかたは、天理教団と広池との間に葛藤をもたらす原因となるものでもあった。本小論は、その葛藤の原因となるものを、斯道会という国民道德運動を推進していた団体での活動を中心に見たものである。

## 二、斯道会について

日露戦争後から報徳会や斯民会、帰一協3会など、いろいろな形で国民道德運動推進のための組織が作られていた。斯道会もそのような団体の一つであり、明治四十五年（一九一〇）七月十四日に当時の各界の諸名士によって設立された。会長は土方久元伯爵、副会長は鮫島重雄陸軍大将で、実務は田辺頼真という人物が行っていた。斯道会趣意書には、

方今我国の形勢は〔中略〕大に憂慮せざる可らざるものあり。何ぞや。社会風紀の頹靡国民道德の衰微是なり。現に社会の秩序を破り上下の大義を紊らんとする傾向なきに非ず。今に於て之が匡正の法を講ぜずんば、国運の将来測り知る可からざるものあらむとす。恭しく案するに、教育の淵源に関する詔勅は、洵に斯道の憲章にして国民道德の準典たり。故に臣民一般に於て、常に拳々服膺し、以て億兆一心の美績を挙げ、上下一徳の実効を奏せざる可からず。蓋し民人各自に於て、之が奉戴修行に勉むると同時に、同感同志の者相團結し、自修他奨相励み相努め、漸く社会一般に及ぼし、以て聖旨の普及貫徹を図るは、実に焦眉の急務

たり。之れ本会を組織せむと欲する所以なり。〔中略〕本会組織の趣旨たるや〔中略〕公共團結の本義に基き、同志相協力して国民思想の統一を図り、国民道義の振興を図らむと欲す。

とあり、その規則には、名称は教育勅語によつてゐること、目的は国民道德の振興を図ること、方法は図書雑誌の頒布や講話・講演会によることが定められ、実行の要旨は「本会の趣旨に適合した道徳上の行為を、団体の力を以て実行する」ことにあると述べ、会員は「日常の起居動作に斯道会の趣旨を体现せねばならぬ」ことをうたつてゐた。そして会員の日常生活の目標として具体的に、「日々少くも一回の善事をする事、約束を恪守すること、朝起をすること、華美な服装を避けること、怒りを制すること」などが挙げられ、さらに会員の実行しなればならないこととして、「教育勅語の正文を諳記して之を理解し得るよう努める事、本会の集会には必らず之を捧読する事、真面目である事、親切である事、快活である事」を定めていた。

斯道会には、協賛員として山県有朋、大木遠吉、波多野敬直、顧問として松方正義、大隈重信、渋沢栄一、評議員として阪谷芳郎、清浦奎吾らが名を連ねており、講師として井上哲次郎、金子堅太郎、鎌田栄吉、沢柳政太郎、森林太郎などのほか、広池と関係の深かった井上頼圀・新渡戸稲造・高田早苗・上田万年・阪谷芳郎などゝいた。会員数は、大正二年（一九一三）十二月末の統計では全国あわせて三十一万人余りであつた。<sup>(5)</sup>

## 三、広池千九郎と斯道会との関係

では広池はいつごろからどのように斯道会と関係を持っていたのであろうか。広池の遺稿のなかに斯道会の規則案らしきものがある。<sup>(6)</sup>これには発起者として自分の名前が書かれ、「本会は神道の主義によつて安心立命し、教育勅語・戊申詔書等の御旨趣を実行するを以て目的とす」以下六ヶ条の規則案が書かれており、その中には「本

会は毎月二回最寄会員の私宅に於て集会をなし講話を聴くこと、「本会は協議の上慈善事業并に労力の寄付等社会国家の公益に尽す」ことが記されている。

さらに大正二年（一九一三）六月十四日、斯道会の土方会長は奈良県丹波市町の天理教本部を訪れ、斯道会講演会を行なった。この講演会は天理中学校講堂で行なわれ、当時の校長は広池であった。このとき中山新治郎（真之亮）管長（真柱）は、斯道会の目的は天理教の目的に一致する点が多いとして、斯道会の運動に協力し教会の機関を利用して会員を募集することを承諾している。<sup>(7)</sup>

この提携について斯道会会長の土方久元は次のように述べている。<sup>(8)</sup>

此両者は、或程度まで同じ目的を持ち同じ事業をして居たのである。「中略」天理教の教典を読んで見ると、尊皇、愛国、明倫、修徳と云ふ様な綱目が挙げられて居る。斯道会の趣意には、社会風紀の頹敗、国民道徳の衰微を匡正したいと云ふ事が述べてある、天理教の教義と斯道会の趣旨とは一致する所が多い、殊に天理教が空理空論を避けて直ちに理想の安楽郷を地上に実現せんとするの熱烈なる期待は、斯道会の実践躬行主義と最も吻合するのである。以上に述べた様な理由から、天理教の本部が斯道会の為に尽力される事となつたのは、神意とは謂へ管長を始め教徒信徒一統の好意として、予の感謝する所である。

さらに田辺頼真は、「人心を浮華より真面目に導くと云ふ事が、既に、宗教心を起させる第一歩である以上は、斯道会の説く所は諸君の伝道の最初の部分を受持つと謂つても差支ない」と斯道会の活動を天理教布教の最初の部分と位置づけている。<sup>(9)</sup>

広池千九郎の日記に斯道会の語が初めて登場してくるのは、大正四年（一九一五）四月のことである。四月二十日の決定事項として「斯道会、海員掖済会講演に出席」と記されており、さらに五日前の四月十五日の条には、

「田辺頼真殿来訪。一件、委曲話せしに驚き入り、大いに同情せらる」と記されている。広池にとって大正四年四月というのは、この年の一月十二日に行なつた故中山管長（大正三年十二月没）の追悼講演会の講演内容が天理教団内部で問題となり、天理中学校長と教育顧問を辞職せねばならなくなつた事件の真最中であり、日記の記事は、この事件のことについて田辺に話して同情されたと解釈できる。広池はすでに四月七日に「たとい曲直いずれにあるも〔中略〕いかなる事も、これを自己に反省し、謝罪し、感謝してこそ、人格の力は強大なれ」と考<sup>(10)</sup>え辞職を決心しており、四月二十日の日記には今後の方針を記している。その方針の中に斯道会講演会への出席のことが記されているわけである。<sup>(11)</sup>よつてこの記事の重要性が理解できる。

そして実際に広池千九郎は斯道会の講師として、大正四年（一九一五）から大正七年（一九一八）にかけて頻繁に講演会に出講し、また機関誌『斯道』（全百号）に論説・談話五十六本を載せ、さらに同誌には広池に言及している記事が七十四本掲載されている。<sup>(12)</sup>その論説の多くのものである、奉仕の精神や親孝行などの道徳の必要性を説き、また自分の苦学して成功した体験を伝えようとし、さらには理想の宗教像を語り、現実の政治問題や労働問題の道徳的解決方法について説明をしている。

以上のほかにも日記には、たとえば大正五年（一九一六）四月二十八日の条には斯道会での講演内容の項目が記されており、さらに日記から田辺頼真を通じて松方正義や山県有朋、さらにはのちに広池の後援をした大木遠吉を紹介されていることなどがわかる。<sup>(13)</sup>しかし広池と斯道会との関係は大正十年代に入ると見られなくなる。これは広池側の都合というよりむしろ斯道会の活動が停滞したためと思われるが、判然としない。<sup>(14)</sup>ただ田辺との関係は昭和時代に入っても継続していたようである。

#### 四、宗教と国家の関係

ではここで広池が天理教に対して何を望んでいたかについて見ておきたい。広池は故中山管長追悼講演の中で、明治四十一年（一九〇八）に作られた教典（明治教典）には教祖中山ミギの真精神が表われていないと主張した。<sup>19</sup> 子の教典に関する意見に就きて一言すべし。抑も天理教には教祖の接受せられたる天啓の教理あり。此教理中には借物の理と云ふ事ありて、これによる時は、我生命・財産・自由の全部は皆神のものにして、又陛下の御所有なり。故に一旦緩急あれば義勇奉公を致す事は勿論、平素と雖も常に執着（所謂八埃）を去つて、国家社会の爲を思ひつ、努力せざるべからず。（中略）乍併該教典には右の借物の教理なく、隨て其国家的觀念に対する所説根本的ならず。是を以て予は之を輔益改訂して、布教上直に実用的たらしめ、以て教師・信徒を満足せしめんと志あり。故に予は故管長追弔演説中に、教典を評して小学校の修身書の類とし、其主旨精神は素より立派にして教理の精神具備すれど、其所説浅きが故に、これ丈にては人心を救済する力に乏しければ教師は須く努力を要すと説きしに、之を種々誤解せられて粉紜を生ずる事と為れり。また同じころ記された別の原稿の中でも、

私の学問上の研究では、今日の道徳は国家に対する道徳程、大なるものはないので、これを教え導くのが教育、宗教の役目であるのですから、天理教の教典に尊皇愛国の項目ある事は、素より当然の事であると考えます。只乍併私の年来希望する所は、右の教典に今一層教祖の尊皇愛国の精神の深い所を表わしたいというに在るのである。

と述べている。つまり天理教の「借り物」の教理と、借り物である身体を他人のために使用する「日の寄進」と述べている。広池はこれを国家に対する犠牲的精神を表わしたものだと考えていた——を教典の中に明確に表わさねばならないと主張しているのである。<sup>21</sup>

さらに追悼講演の原稿には、<sup>22</sup>天理教の目的として「病助けは目的にあらずして人心救済が目的なり、故に恒久的道徳心の養成に力を注ぐ事」、あるいは人心救済が「目的にして、教庁・支庁・事務所・詰所の事務は、之に伴随する副事業たるのみ、本末を顛倒せば御道にあらず、救済は目的にして経済は之を達する手段たるのみ、亦顛倒すべからず」と記されており、組織維持が中心となる弊害を指摘し恒久的道徳心の養成の必要性を説いていることがわかる。

では次に広池は宗教は国家・社会に対してどうあるべきだと考えていたのであろうか。これについては次のような講演がある。<sup>23</sup>

天理教は如何なる基礎を有するかといへば、道徳の根本として神宮・神社・皇室・国家を中心とするのであります。若し之を中心としないものであつたら天理教ではない。神宮・神社・皇室・国家中心主義を全うするには何によるかと云へば天理教によつて得らるのである。此の主義を全うする爲めに天理教を撰ぶのである。天理教其のものの繁栄を目的とするのではない。国家を繁栄せしむるには天理教を繁栄せしむればよいのであるから、国家社会の繁栄を図るには天理教の信仰を盛ならしむるがよいといふにあるのである。此の関係は往々誤解に陥り易いものであるから各人はよくここに注意して誤りなき様にせねばならぬ。

あるいは、別の箇所<sup>24</sup>で、

天理教の繁栄のみを念とせず国家皇室中心主義を完成せしむるために天理教信仰を盛ならしめる。故に天理教臭き処を去らねばならぬ。（中略）信仰の意義安心立命は自分が天理教の爲にするといふ基礎にあるもの

ならば大に誤れるものである。

と述べて、国家の繁栄のために天理教の信仰をするのであって、信仰は天理教のためにはないことを主張している。

同様に『斯道』に掲載した論説のなかでも、国家主義と天理教との関係について、それを「天理教を殺すか、生ずるか云ふ所謂死活的大問題」と位置づけ、「忠君愛国と天理教とが根本的基礎の上から融合しなければ、将来本教発展の上に少からざる障害が起る」と述べ、この点について「未だ天理教に十分此の融合が出来て居ないために、各地で一寸々々其の批難を聞く」と天理教が邪教視されている原因を説いている。そして忠君愛国の思想が十分に伝えられていないことについて、「当初の信者が幼稚であつたために、教祖の遺された遺訓を完全に理解する力なく、其の忠君愛国の教理を世に現はす事が出来なかつたのである」と説明している。さらに「此れがために天理教では忠君愛国の教理がないと云ふやうに思はれ、外部から之を強ひられて、教理よりも劣つた所の忠君愛国説を教理のやうにする事になつた次第」であると、天理教はもともと忠君愛国主義の宗教であり、明治教典には天理教の忠君愛国主義が十分に表わされていないことに言及している。そして天理教の優れているところを他の宗教と比較して、「今迄の宗教は〔中略〕宗教以外のものは皆な其の宗教の従属と見たのである」のに対して、「天理教は神様だけは絶対であるが其他は相対的のものとする。〔中略〕天理教が絶対であると思つて居る人もあるやうであるが、それは甚しい間違ひです。天理王命は絶対であるが天理教は絶対ではない」と述べて教団にとらわれない信仰を強調している。そして「忠君愛国と助け一条とが一致」しなければならぬとし、このことは天理教にとつて「余程重大な事件であるに拘はらず、教会でも忠君愛国と云ふ事と助け一条と云ふ事を別けて見るやうな傾向があるので、他から攻撃を受けるやうな事もあつた次第である。故にこゝの理を弁へて、忠

君愛国とお助けとの一致を見出して一生懸命布教に従事し」なければならぬと要望している。<sup>(25)</sup>

忠君愛国主義やナショナリズム(国家主義)は対立を生む原因ではないのか。これについて広池は次のように述べて、忠君愛国の思想は平和思想につながるものであると説明している。<sup>(26)</sup>

天理教の教えが行なわれるれば、いずれの国民も、その各自の因縁の上から、自分の最大の道徳は国家に尽くすにあることを、人類の因縁の上より自覚して、各その国のために尽くすに至るべし。同時にその各国の上流人が、かかる信念を有するに至れば、その国を愛する最大のことは、その国民を愛するに在ることを悟れば、大抵のことは相互に譲歩して、戦争を避け、世界の平和これより成立すべし。

国をほんとうに愛する気持ちがあれば、自国を滅ぼし国民を傷つけるような行為を起こすことはなくなる。つまり平和な世界が築かれると述べているのである。

## 五、広池の斯道会での活動

広池は大正四年(一九一五)から大正七年(一九一八)にかけて、たいへん精力的に各地で講演活動を行なっている。これは天理教の教会を回つた場合もあったが、斯道会の主催である場合も多かった。『斯道』や『道の友』に報告されている広池がかかわつた斯道会講演を列記しておく。

大正2・12・6 東大教会

12・7 東本分教会

12・8 日本橋大教会

田辺「斯道会と天理教との提携に就て」

広池「天理教々理と其効果」

- |        |             |  |
|--------|-------------|--|
| 3・11・7 | 宇都宮女子師範学校   | 下野教育会・下野新聞社主催                            |
| 11・8   | 塩谷郡矢板郡農林学校  | 西村豊（陸軍教授）                                |
| 11・9   | 上都賀郡鹿沼小学校   | 広池「時局および戦後国民の覚悟」                         |
| 5・5・4  | 白田町公会堂      | 白田分会主催、広池「斯道会の趣旨精神に就きて」                  |
| 6・2・21 | 宇野商店        | 田辺・広池                                    |
| 3・10   | 天理教東京教務支庁   | 高木兼寛（医博・男爵）「心身の修養」<br>田辺「恭儉」、広池「尊皇愛国と宗教」 |
| 3・21   | 小石川支教会      | 奥谷文智（斯道編集員）「陽氣づとめ」、広池「宗教と国体」             |
| 4・30   | 南蒲原郡長沢小学校   | 長沢村教育会主催                                 |
| 8・6    | 横須賀高等女学校    |  |
| 8・7    | 横須賀市役所      | 横須賀教友会主催                                 |
| 8・8    | 横須賀公会所      |  |
| 12・20  | 養父郡宿南分会     |  |
| 7・1・13 | 上伊那郡南向村日會分会 |  |

天理教と斯道会の提携による講演会は実際はどのようなものであったのかについて、『道の友』は次のように報じている。<sup>(28)</sup>

去る〔大正六年〕三月十日東京支庁に於て旗上げしたる斯道会講演会は四月は日本橋大教会に於て、五月

は東本分教会に於て、本月は東大教会に於て、二条侯爵、高木男爵、西村陸軍大学教授、広池博士、田辺幹事等出席の上、国民道徳に関する講演会を開催し、毎会予期以上の効果を収めたが、国体と天理教との調和を実現する好箇の一新運動として識者より多大の称讃を蒙りつゝありて、各地方に於ても漸く此の新運動に習ひ天理教会堂に於て斯道会主義の講演会を開催せんとする傾向あるは、国家の爲め、将た又、天理教の爲め真に賀すべき也。

さらに大正六年（一九一七）より開催された天理教国民道徳講演会は斯道会との共催であった。この国民道徳講演会について広池は次のように位置づけている。<sup>(29)</sup>

〔天理教〕教理の基礎は我国体の基礎と同一であるのです。かくの如き事情が、近年に至つて上流有識者の間に分かつて来ましたのです。然るにここに、又大正の政変以来、我国体の前途を憂慮せられて設立されたる国体擁護の斯道会設立者土方伯及び鮫島大将等も事実を確かめられ、大正二年以来天理教本部に参られて天理教と斯道会とは向後国体擁護に関しては相提携して活動すべしとの事になつたのであります。〔中略〕かくの如く天理教は近年著しく、其の固有の卓越せる真理を發揮して、国家の爲に奔走すると云う点より、今回は今一步進んで、世界に於ける時局に鑑み、我万世一系の国体の擁護は一日も忽せにすべからざる事を覺り、今回私共をして全国を巡回させる事となつた次第である。そこで私の講演は普通の宗教演説の如き偏狭固陋の説明を試みるものでなく、全く純然たる国体の擁護の説明にあるので、現代の最も進歩せる科学上の学理に依るのでありますから、一般有志の方は尽く御来聴を願いたい。

## 六、おわりに

以上のように広池千九郎は天理教団のためだけにではなく、天理教の普及が国民道徳の振興に役立つという一歩広い視点で活動していた。それを象徴しているのが斯道会での活動である。そして天理教と斯道会が提携する以前より、広池が斯道会とかかわりを持ち、この提携を用意したのが広池であった可能性もある。広池は、天理教も斯道会も、ともに教育勅語や戊申詔書の趣旨を實行し、国民の恒久的道徳心の養成に役立つものと考えていた。このことは、広池が天理教教理の中でも、国家や社会への献身を説いている「借り物」や「日の寄進」の教理を特に重要視し、みずからは「義務先行」を唱導しているところに表われていると思われる。さらに天理教の教典問題で明治教典に「日の寄進」の教理が十分に表わされていないと批判したのは、天から与えられた自分の生命を人のため社会のため国家のために捧げるという一番重要なことが欠けていると考えたからであろう。

そしてさらに、広池が天理教入信以前から国民道徳振興の必要性を主張しており、それが広池の天理教入信の背景にあったとすれば、広池は天理教入信により天理教団を通じて、あるいは天理中学校長辞職後は斯道会の活動などを通じて国民道徳の普及活動に尽力していたと言えよう。

もともと、斯道会とは名ばかりで実態は天理教であるという批判や、広池も斯道会よりは天理教組織を中心に活動しており、その説くところも天理教教理であったのではないかという反論もなされよう。しかしより重要なことは、この時期の天理教団が理由はともあれ天理教の枠を超えて国民道徳運動に協力しており、この運動を天理教側を代表してかわっていたのが広池千九郎であり、さらに広池が斯道会にかかわるようになったのは、広池の思想にもとづくところが大きかったのである。別な言葉で言えば、広池は天理教団にとっては国民道徳担当者

であるとともに、広池はみずからの道徳観を天理教や斯道会に託していたといえるのではなからうか。ここに本稿のタイトルである国民道徳運動推進者としての広池千九郎の姿が浮かびあがってくるのである。

広池の天理教入信も天理教との関係の断絶も、ともに天理教団の当時のあり方が大きな原因をなしている。広池は国民道徳普及・国民の道徳心の向上に役立つものとして神道一派である天理教に期待した。しかし結局この期待は破られることとなった。天理教の倍加運動や四十年祭に向けての活動は、天理教も教団のために存在しているという現実を広池に痛感させることとなり、やがて広池は天理教と縁を切っていくことになるのである。それでも広池がのちのちまで天理教に恩義を感じ、天理教を自分の今日をあらしめた体験をあたえてくれた恩人（「潜在的伝統」として位置づけ、寄進を続けたのは、天理教教理研究や教徒との接触によって、広池が今まで知らなかった多くのことを教えられたことを感謝していたからにはほかならない。その教えられた側面とは、本稿で扱った社会に対する働きかけの問題とは少し性格の異なる問題であり、それはどちらかというと精神的な問題であった。たとえば、人を助けようとする心使いや感謝して日々を暮らす心使い、低くやさしい心使いの重要性に気づかせてくれたのが天理教であり、一人ひとりの人間を救済してみろという実体験を与えてくれたのが天理教であり、みずからも病弱な身体を天理教に接することによって永らえることができたことと認識できたから、天理教に対していつまでも恩義を感じていたのであろう。

### 〈注〉

(1) 本小論は昭和六十二年（一九八七）十二月に行なわれたモラロジー研究発表会での発表をまとめたものである。

なお広池の天理教入信については拙稿「明治末期の社会・天理教・広池千九郎」（『モラロジー研究』第二十五

号、昭和六十三年）を参照されたい。

- (2) ある人物が宗教を信じているという場合、その人物が主体性を失って宗教に呑みこまれて、教団の指導するままに動かされるようになるというイメージがある。広池千九郎の天理教入信についても、ややもするとこのようなイメージを持ちやすい。しかし歴史学者であり、『古事類苑』の宗教部を編纂し、神宮皇学館の神道の担当教授でもあった広池は、天理教に無批判に自分を没入させて行ったのであろうか。さらにのちに道徳科学という独特の「学問」を創造することになる広池にとって天理教入信とは何であったのかを考えると、広池が天理教のどこに感動し、天理教に何を期待し、何を学んだかを見極めねばならない。筆者は広池と天理教とのかわりを「天理教入信」という言葉で表わすよりも、「天理教研究」という言葉で表わす方がより適切であると考えている。
- (3) 婦一協会については中野邦「婦一協会小考」（『日本女子大学紀要』（文学部）二十六・三十七、一九八六・一九八七）が参考となる。
- (4)(5) 斯道会「斯道会の目的、方法、事業」大正三年。
- (6) 遺稿「斯道会規則案」（仮題）、明治四十五年推定。
- (7) この提携によって斯道会の会員数は一挙に拡大した。会員のうち二五、六万人は天理教徒による勧誘を通じて

であったらしい。また斯道会の機関紙「斯道」に天理版が設けられた。天理版は、普通の「斯道」（約五十頁）に十頁ほどの「天理版」と題するページを加えたものである。

- (8) 土方久元「天理教と斯道会」（『道の友』第二六一号、大正二年八月号）二一三頁。
- (9) 田辺頼真「斯道会の要旨」（『道の友』第二六七号、大正三年二月号）四九頁。
- (10) モラロジ―研究所編『広池千九郎日記』（全六巻、昭和六十一年―六十三年）広池学園出版部。
- (11) 『広池千九郎日記1』三〇三頁。
- (12) 同前、三〇〇頁。
- (13) 同前、二九二―二九三頁。
- (14) このほかに労働問題の解決に尽力することや自分の研究計画についても記されている。
- (15) 広池に関する記事は、天理版だけでなく全誌面に掲載されている。ただし動向については天理版が多い。これは天理教機関誌『道の友』の記者であり広池とも親しかった奥谷文智が、大正五年に『斯道』の編集記者となったことによる。
- (16) 『広池千九郎日記2』一七頁。
- (17) 『広池千九郎日記1』二二八頁（大正三年五月十三日の

条、『広池千九郎日記2』一八三頁（大正八年五月十二日の条）、同二二五頁（大正九年一月十八日の条）。

- (18) 『斯道』は大正十年に誌面を刷新し天理版を廃した。このことが斯道会にどのような影響を与えたかはわからないが、この頃から月刊発行が難しくなっていたようであり、衰退に向かっていたようである。

- (19) 『中外日報』大正四年七月十日。
- (20) 遺稿「『新宗教』乙卯六月号の天理教観に対する卑見」大正四年六月。この遺稿の中で広池は自分の天理教入信の理由について以下のように述べている。

凡そ宗教の信仰は全人格の傾倒でありますから、人類として個人としての渴求を満足すると同時に、国民として社会の一員としての要求を満足する丈の力がなければ、将来に於ける真の大宗教ではない。（中略）従来の哲理的革命的宗教は、私の眼から見れば単純幼稚にして、到底真面目にその教理に服従する事は出来ぬのである。然るに明治四十二年に至って天理教に接触し、茲にその教理が今日の科学に一致し進化論に一致し而して我が国体に一致し、且つ實際上に人心救済に裨益ある事を知りて大いに予の注意を惹き、遂に予の年来、宗教に向って希望せる理想に合致したものであることを発見致しましたものでありますから、始

めて天理教の真の信仰に入り、之が為に心身を捧げ、全人格を傾倒するに至った次第であります。

なお入信の事情については前掲拙稿参照。

- (21) 天理教と国家との関係について、現在では天理教教理と天皇制国家・国家神道との対立面を強調しており、明治教典は一派独立のために国家神道に準拠させられたものであると位置づけられている。広池の主張は現在の教理解釈とは全く反対であり、教祖の忠君愛国の精神は明治教典では不十分だというものである。しかし明治教典が作製された当時から、天理教内には明治教典には教祖の真の精神が宿っていないという意見を持つものもおり、教祖の真精神を教典の中に表わせという広池の主張は共感を生む部分もあった。

- (22) 遺稿「管長追悼講演原稿」（仮題）、大正四年推定。
- (23) 「天理教教理講習会講話之概要」三―四頁、大正四年八月、天理教岐美分教会・東濃支教会。

- (24) 同前、八〇―九九頁。
- (25) 「我が国体と天理教」（『斯道』第三十二号、大正六年五月号）四九―五二頁。

- (26) このような広池の立場を、天理大学で天理教伝道史を研究している高野友治教授は、「広池博士の説く天理教は、かならずしも『明治教典』に依拠していない。その



粹をぬけて、全世界的、全宇宙的な倫理道徳を説いていた。大宮兵馬氏〔追悼講演を問題視した人物……櫻井注〕はそれを嫌ったのでないかと思う。それで、この事を政府へ報告するよと天理教会本部に迫ったのでないか」と説明している（『広池千九郎小論』、『創象』第二十八号、昭和六十年）。

(27) 『広池千九郎日記』二九八頁、大正四年四月十一日の条。

(28) 『道の友』第三〇七号（大正六年六月号）一二四頁。

(29) 『函館新聞』大正六年九月十八日。この記事については函館市の尾崎宏一氏より提供を受けた、ここに謝意を表したい。